

---

# そして僕はいなくなった（吹雪の山荘）

イボヤギ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

そして僕はいなくなった（吹雪の山荘）

### 【Nコード】

N0366C

### 【作者名】

イボヤギ

### 【あらすじ】

僕たち6人のメンバーは、吹雪に見舞われた山荘に閉じ込められてしまった。しかも、すでに3人のメンバーが殺されている！僕は真相を探りつつ、残っている二人の女の子の安否も気遣いながら行動したが……とうとう、一人ぼっちになってしまう。残るは、「真犯人と直接対決するだけだ！」果たして、僕は対決を制して生きて帰還できるのだろうか……\*シリーズ第1作です。今回、文章を手直しました。（7/17）bヨイボヤギ

そして僕はいなくなった（吹雪の山荘）

そして僕はいなくなった（吹雪の山荘）

「で、どっちが殺ったんだよ！ 正直に言えよ！」

思わず大声を張り上げた。普段は冷静を保っているつもりが、今回ばかりはそうも言っておれない。

「私の訳がないじゃない！ 三人を殺す動機なんて持ってないし」

真由美が、負けないぐらいの大声で叫んだ。そして、傍らかたわの文子の顔を露骨に睨む。

「絶対にこの娘に決まってるわ！ 何せ、浩に振られたばかりだし」

「何言ってるのよ、アンタ！ バツカみたい！ それぐらいで三人も殺すもんか？ それに、私は振られてなんかいないし……とか何とか言って、犯人はアンタのほうでしょ！ 敦彦と春香と三角関係だったってもつばらの噂よ！」

文子も猛烈に反論する。

今にも殴り合いを始めそうな“一触即発”の状況であった。元々、キャンパスでは本当の姉妹のように“仲良し”で通っている二人が、目の前でこうやって罵り合っているのを見ると、つい溜め息が出てしまう。

僕たちP大学の教育学部のクラスメート六人は、“卒業記念旅行”と銘打って文子の叔父が経営する山荘にやってきたのであった。

叔父さんは海外出張中で、ここは僕たちの貸し切りの状態であった。ただ予想外だったのは……まだ、到着してたったの二日目だということ……その間に、すでに浩と春香があっけなく死んでしまったということである。それも二人とも無残な殺され方で、である。また、生憎あいにくの猛吹雪の為に、僕たちは山荘から逃げ出すこともできず、加えて電話が不通になってしまったので、この場で吹雪が止むのをじっと待つしか術がなかった。そして、たった今、敦彦の刺殺体を発

そして僕はいなくなった（吹雪の山荘）

見たところである。そう、三人目の犠牲者だ。で、誰からともなく、残った三人で食堂に集まってきた次第だ。三人とも、度重なるシヨックで疲労の色は隠せない。

ふと、僕はあることに気づいた。

「ほら、よくあるだろう？ 死んだと思っていた人間が、実は死んだ振りをしていただけで、本当は生きていてさ、その後もこっそりと犯行を重ねてゆくつて、ね？」

真由美と文子は相変わらず睨み合っていて、こちらの話にもまったく耳を傾けていない。それでもめげることなく僕は続けた。

「だから、今から三人の遺体をもう一度確認したいと思う。万が一の事もあるんで……だから皆で確認しに行こう！」

努めて穏やかに言ったつもりだったが、

「そんなに気になるんだったら、アンタ一人で行ったら？ 大体、アンタが犯人かも知れないじゃない！ この場に及んで、善人ぶるんじゃないよ！」

真由美が捲くし立てる。興奮しているせいか、普段の大人しさからはとても想像できない言葉使いだ。

「そうそう。二人きりで行って、そこでアンタに“ブスッ”とやられたら身も蓋もないしね。あゝ怖！」

文子も珍しく真由美に同調した。彼女も人が百八十度変わった様子で、口が粗暴になっていた。

「わかった、わかった！ じゃあ僕が一人で見てくる。くれぐれも殺し合いとかしないように、な！」

ちよつとムカついたので皮肉を残して、僕は食堂の扉を開けっ放しにしたまま二階へと向かった。

当然、気持ちが悪くない作業ではあったが、結果として三人ともちゃんと（？）死んでいた。と、なると……

（やはりあの二人のどちらか、なのか？）

そして僕はいなくなった（吹雪の山荘）

それと同時に、

（しまった！ どっちが犯人にしろ、もう片方が危ない！）  
そう思うや否や、僕はあわてて食堂に引き返した。

（！……）

食堂で見たものは、果たして一人の……じゃない！ なんと床に倒れた血まみれの二人の身体であった。いくら罵倒し合っていたからって、まさか本当に殺し合いをしてしまうとは！

（いや、待てよ？）

再び周りを見回す。やはり、肝心の凶器がどこにも見当たらない。恐らくはナイフか包丁あたりで刺されたと思うが、二人の身体にはもちろんの事、周囲にも見あたらない。

僕は、この時点で初めて恐怖というものを感じた。しかもかなり強烈に。今の今まで、犯人は仲間の内の誰かと考えており、それを根拠にして、犯人が彼女たちのいずれかでも、一対一では油断しない限り大丈夫だ……とタカをくくっていたのである。でも、実際には正体不明の殺人鬼が潜んでいるとなると、話が根本から違ってくる。かなりまずい展開だ。

とにかくすぐに、僕は武器になるものを求めてくまなく家中を探した。成果は、良く研がれた包丁二本と、ゴルフのアイアンぐらいであった。まあ、これでもある程度は対抗できるかもしれない。それと、万が一の際に対応できるように、蠟燭も数本持ち出した。もし殺人鬼が、銃やジェイソンの斧を使うのであれば、一目散に外に逃げるつもりである。外は相変わらずの猛吹雪ではあるが、ここで抵抗するよりも助かる可能性は……かなり低いことは低いが……ありそうだ。そう、直接的に殺られるよりはまだましである。

僕は、食堂に隣接しているロビーを基地にする事にした。理由は、周囲が見渡せるし、いざとなれば玄関から逃走できるからだ。自分の部屋にいるのは、狭くて逃げ場を失うように却って危険なように

感じた。

武器は、包丁を選択した。僕は握った包丁にタオルを巻いて右手に固定してみた。素人知識だが、ぬかりはない。

いたずらに時間が経過していった。僕はある程度、平常心に近い状態まで戻っていた。

(殺人鬼とは、一体どんな奴なんだろうか?)

どうしても、般若はんやの面を被った男が脳裏をよぎってしまう。

(こりゃ、推理物の読みすぎだな)

思わず自嘲してしまった。

(しかし、何が目的なんだ?)

(はたまた、目的がない無差別殺人なのか?)

(で、そいつはこの家のどこに潜んでいるのか?)

(ここには、いわゆる“隠し部屋”的なものが存在するのか?)

以前、皆で手分けして探した時には影も形もなかったんだが。

(山荘の周りに、人が潜めるだけの小屋などがあるのだろうか?)

疑問の洪水である。

いろいろと考えてはみたが、どうしても般若の仮面を着けた男がある一定の域から具現化してこない。いくら鬼でも生身の人間なんだから、飯ぐらいは食らうだろう。しかし、少なくとも、この山荘の食料の減り具合におかしな点は見当たらない。

(では、やはり外に潜んでいるのか?)

でも、戸締りは当然ながら嚴重にチェックしてきたはずだ。

(残る可能性は? と言えば、この山荘と外部を繋げた“秘密の通路”の存在だけか?)

だが、なんとなくこれも非現実的に見えてきた。

そうこう思案していると、すでに外が暗くなっているのに気づき、僕はロビーの電燈を点けた。何かを考えていなければ不安で仕方がないのだろう……自分自身でわかってはいた。

そして僕はいなくなった(吹雪の山荘)

そして僕はいなくなった（吹雪の山荘）

しばらく考えにふけっていると、突然部屋の灯かりが消え、周囲は完全な闇に陥った。

（やはり、この手で来たか。予想どおりだ。よし、勝機は十分にあるぞ）

僕はそうつぶやくと同時に、殺人者の存在を実感し思わず身震いした。

とっさにポケットをまさぐり、ライターで目の前に立てている蠟燭を灯した。左手なので、火を点けるまで一寸時間がかかってしまった。

（落ち着けよ！ 落ち着くんのだ！）

そして、標的になるのを恐れた僕は床に素早く平伏し、静かに移動を始めた。蠟燭の灯はあくまでもダミーであり、そこに近づいてくる殺人鬼の姿を確認するつもりだ。

（勝敗の分かれ目は、戦うか？ あるいは、逃げるか？ ……この正確な判断だぞ！）

しんとした状況の中で、玄関辺りになにやら灯りが見えた。誰かが蠟燭を持って立っているようだ。敵も灯した蠟燭を持っているとは想定外だった。

（くそつ、やけに堂々としてやがる）

そう吐くのと同時に、僕は右手の包丁をさらに強く握り締めた。よりによって逃走口と想定していた玄関にいるとは。

（だが、スキもありそうだし……よし、ここは勝負だ！）

判断は一瞬だった。僕は“戦う”を選択し、己の全精神を集中させた。

敵の蠟燭の灯りが届くか届かないか微妙な位置まで這って移動し、そこで、一気に僕は立ち上がって蠟燭に向かって突進した。

（今だ！！）

その瞬間であった。脳天にいきなりの衝撃を受け、僕はその場に

そして僕はいなくなった（吹雪の山荘）

倒れこんでしまった。

（えっ？ 嘘だろ？ 後ろから？）

予期せぬ出来事だった。

次の瞬間、今度は、目の前の蠟燭の方からも第二弾の攻撃があった。

もはや、痛みは感じなかった。

どしゃぶりのように、顔の上から下にかけて、何筋も雨が流れているように感じた。

とにかく、僕の身体はやすらぎを急に欲し出していた。

もう、僕は猛烈な睡魔に襲われているような感覚になっていた。

僕の様子を上から覗き込んでいる目が、薄っすらと見えた……「  
っ、二っ、三っ……四っ。」

（四っ、も？）

その時、初めて僕は自分のミスに気づいてしまった。

（何故、自分自身で言っておきながら、僕は確認をしなかったんだろっ？）

気力を絞って、最後の言葉を上に吐き出してみた。

「……立派な女優になれるよ……お、お二人さんとも……」  
そして、僕はこの世からいなくなってしまった……

了

(後書き)

\*イボヤギでございます。お忙しい中、最後までお付き合いいただきまして、心より御礼申し上げます。これが最初の作品になります。なお、当愚作に関しましてご感想ならびにご指摘等を頂戴できれば幸いに存じます。では、再びお会いできます日を楽しみにしております。本日は誠に有難うございました。07/05/21

そして僕はいなくなった(吹雪の山荘)

そして僕はいなくなった（吹雪の山荘）

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0366c/>

---

そして僕はいなくなった（吹雪の山荘）

2008年11月7日06時37分発行